

第6話 帰国入試を考える 高校入試

さて、前回までは中学入試のお話でした。今回から、しばらく高校入試について考えてみましょう。

まず、中学入試と高校入試の違いは何でしょうか。

1つは、高校入試が「必須」だということです。小学生であれば、帰国生であっても受験をしない、という選択はあり得ます。高校入試に照準をあわせれば、もっと伸びしろのある子も多いので、作戦的に中学受験をしない場合もあるでしょう。

しかし、中学生は受験勉強から逃げることは出来ませんね。いさぎよく勉強に励めるというものです。

本人の自覚が早ければ早いほど、差は大きくなります。例えば、中1・中2の数学が抜けたまま、さあ因数分解を、と言われても無理がありますね。

高校入試は、本人の意識との戦いなのです。（中学入試は、本人とご両親半分ずつ。）

2つめは、帰国生も一般生も同じ試験を受ける（ことが多い）ということ。専用の入試を行う学校もありますが、それだけを目指していると、他の学校に潰しが利かなくなってしまうので要注意。ということで、高校入試へ向けた勉強は帰国生でも日本の子と同じです。そしてここには、帰国生にとって有利な点と不利な点が両存しています。

帰国生に有利な点とは、英語のアドバンテージが大きいことです。一般入試と同一問題ならば、その設定は英検3級～準2級のレベルなので、現地校を生き抜いている子は満点近くを取ることも難しくなideしょう。（日本語訳が壊滅することもあります...）

日本人学校の子にとっては、一般受験の子と同じ土俵に立つというだけなので、英語に関しての不利はありません。

不利な点を考えてみましょう。現地校生であれば、**math, history, biology**といった現地の勉強をしながら、日本の受験勉強もこなさなければなりません。理科などでは、「英語なら知ってるのに」なんて声もちらほら。

では、日本人学校の子には楽チンかと言えば、そうとも言えません。どうしても海外の子は行動に制限がありますので、自分の足で塾に行くことも出来なければ、図書館で友達と勉強！ということも難しいです。英語に頼れないぶん、全体的な努力が必要になります。

特に、中1の過ごし方には気を付けて欲しいところです。せっかくの海外で、キャンプなどにも積極的に参加してほしいのですが、数学などはサボるとあっという間に（本当に）置いていかれてしまいます。勉強も部活もアクティビティも、全力でいきましょう。

実際に高校受験の帰国枠とはどのようなものなのでしょう。

大きく分けて

- ・帰国枠を設け、専用の入試を行っている学校（科目の減免）
- ・帰国枠を設けてはいるが、一般生と同じ試験を受ける学校に分かれます。

具体的には、同志社国際（帰国生は5科目→3科目）青山学院（帰国生は「適性検査」）

早慶付属（試験は同一だが、合格判定を優遇）などがあげられます。

次回、もうすこし詳しく見ていきましょう。

著者：谷口 仁

May 17 2016